小学校におけるハンドボール授業に関する事例研究
－下浜小学校における実践例の解釈を中心に－

富樫一樹（小学校課程・保健体育副専攻）

〈序論〉　研究動機・研究目的・研究方法

これまでになされてきたハンドボールに関する様々な研究や授業実践、また、その他多くの人達の努力により、ハンドボールの教材価値が認められ、小学校学習指導要領のボール運動の内容にハンドボールが新たに加わった。このことにより、ハンドボールが授業で行われることになったが、ハンドボールの指導実践に直接役立つことを目指した授業研究はまだ進んでいない。そこで、ボール運動教材としての、ハンドボールの授業研究を深めるために、この研究を進めるに至った。

本研究では、いち早く学校現場にハンドボールの授業を取り入れた秋田市立下浜小学校の実践を例に、質的研究の観点から授業を成り立たせている内容を分析し、一般化することを目的とする。その方法として、秋田市立下浜小学校６年生（児童22名）を対象とした授業実践をまとめ、教科内容、教材、教具、教授行為、学習集団の５つの点から考察する。

〈本論〉　第一章　　質的研究について

質的研究とは、研究者・実践者・子どもたちが授業をどのように見ているのか。これらの研究課題を明らかにする有効な研究方法の一つである。量的研究では観察されない、教師や子どもによる現象の背後に隠されている本質や実践の内面的な動きの意味を読み取ることに意義がある。

第二章　　下浜小学校の授業実践

①単元名②子どもたちの準備状況③種目特性のとらえ方④教材化の工夫⑤ねらい⑥学習指導計画⑦実践結果⑧今後の課題の８つの点からまとめた。

第三章　　下浜小学校の授業実践の考察

（１）教科内容を「素材に固有な内容」「素材の違いをい越える、類似・共通した一般的内容」の点から考察した。「攻め方・守り方の工夫」「ゲームでの構成な態度、お互いの認め合い」を教科内容として捉らえている。

（２）教材を「学習内容を習得させるための手段」と捉らえ考察した。教科内容を習得させるための手段として単元を４段階の分け、各段階にあったゲームができるようにし、話し合いや練習を充実させることで、除々にゲームの質を高めていけるような教材にしている。

（３）教具は学習の有効性を高めるため、教材づくりの全体的視野の中において考えられなければならない。下浜小の実践では、児童の実態に合わせ、運動覚、触覚、視覚に配慮したボールを使用している。

（４）教授行為では、攻め方・守り方の動きの形を紹介することで、個々の動きや戦術的な動き方を向上させようとしている。Ｌ．グリフィンのＧＰＡＩとゲーム様相の分類を用いてゲームを分析し、ゲームパフォーマンスの向上が確認できた。

（５）学習集団では、どのような力を持った子どもも存在感や有能感を味わうことのできる人間関係が生まれるような活動ができるチームづくり重視される。下浜小の実践では、兄弟チーム制とすることで、お互いを認め合い、チーム内・チーム間活動ができる学習集団にしている。

〈結論〉

本研究では、ハンドボールの授業研究を深めるために、ハンドボールを授業にいち早く取り入れた下浜小学校の実践を例に、質的研究の観点から授業を成立たせている内容を分析し、一般化することを目的として行った。

その結果、下浜小学校の授業実践では、下浜ハンドボールという教材を用いることにより、教科内容としての知識や技術を学習することを可能にした。また、このような学習の保証には、子どもたちの運動覚、触覚、視覚に配慮したボールを使うといった教具の工夫が必要であった。しかし、この教材を形式的に用いれば誰にでも実践できるものではない。子どもたちが攻め方・守り方の形を工夫できるように練習例や攻め・守りの形を紹介する教授行為や兄弟チーム制とし、お互いの動きを見合い、アドバイスしあうことができるような学習集団の組織化がなければ成立しないことが明らかになった。

以上の結果や子どもたちの授業を終えての感想文などから、下浜小学校での、教科内容のとらえ方、教材や教具の工夫、学習集団の組織化、教授行為は一般化できるものであると言える。

これは、ハンドボールが「教材づくりがしやすい」「子どもたちにとって楽しいボールゲームである」「戦術の学習が容易である」といった教材としての「よさ」を持っているからであると推測できる。

本研究の今後の課題としては、教材としてのハンドボールの有効性を、他のボール運動種目との比較によって検討していくことにあるだろう。